

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

中世ゲーム事情：チェスと競馬

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西尾, 哲夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4570

中世ゲーム事情

チェスと競馬

ألعاب العصور الوسطى: الشطرنج وسباق الخيل

国立民族学博物館教授

西尾 哲夫

1. ルークの語源はルフ鳥？ — チェス —

現在、アラビアンナイト（「千一夜物語」「千夜一夜物語」）として知られている長大な物語集は、アッバース朝（七五〇～一二五八）の首都バグダードで原型が成立したのではないかとされている。日本でいえば華やかな貴族文化が栄えた平安朝にあたる。ちなみに二〇〇八年は「源氏物語千年紀」ということでさまざまなイベントが催されたが、アラビアンナイトの原型が登場したのも源氏物語の成立とはほぼ同じころだった。

成立当時のアラビアンナイトがどのような形をしていたかはよくわかっていない。題名には「千一夜」とあるが、実際に千一夜分の物語が収録されていたかどうか、今となっては闇の中といった状態である。だが同時代資料などから、八ないし九世紀ころにはすでに語り手シェヘラザードが登場する物語集が実在したことがわかっている。

ここで少し世界史をおさらいしておくと、アッバース朝はイスラーム文明の黄金期にあたりとされており、首都バグダードは東西交易の中心地となって空前のにぎわいを見せた。アラビアンナイトに採録されている「バグダードの荷担ぎ屋と三人の娘たちの物語」は、官能と伝奇的要素が渾然一体となった傑作として名高いが、娘の一人がバグダードの市場で世界各地から集まった品物を次々と買っていく場面は、当時の物流事情を示す社会資料としても注目されている。



「カフェでチェスを指すアーリマ（ダンサー）」
オリエンタリスト画家として知られるジェロームによる

この「バグダードの荷担ぎ屋と三人の娘たちの物語」は、いわゆる枠物語の体裁をとっており、娘たちが暮らす豪壮な屋敷を訪れた三人の遊行僧らが数奇な身の上を語るという構成になっている。そろって左目を失っている三人の遊行僧は全員が異国の王子なのだが、わけあって流浪の身となり、バグダードにたどりついたのだった。

第二の遊行僧は父王の使いとなってインドをめざすうちに盗賊にあって所持品を奪われ、しかたなく樵（きこり）に身をやつして世すぎをするうちに、イフリート（魔人の一種）の愛人と一夜をすごすことになる。事実を知ったイフリートは王子を猿（ヒビ）の姿に変えてしまうのだが、言葉こそ話せないものの人としての知性は変わらず、チェスの腕はいささかも衰えていなかった。

ここで王様はチェス盤を持ってこいと命じられ、わたくしに向かってこう訊ねられました「一局、さしてみるかな？」。わたくしは、はいとうなずくと王様の御前まで進み、駒を並べて王様相手に二局をさしたのでございます。そして二度ともわたくしが勝者となりました。王様は驚きのあまりに言葉も出ません。そこでわたくしは筆入れをとりだすと、筆ペンをさらさらと走らせて次の詩を書いたのでございます……（バートン版アラビアンナイトより）

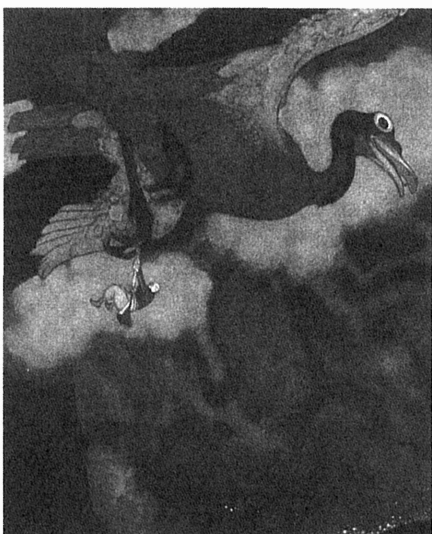
この話以外にもアラビアンナイトには、チェスを指す場面が何度か登場する。アッバース朝歴代カリフにはチェスを愛好する者が多く、名手を集めた御前試合などもあったらしい。チェスは古代インドからペルシアやアラブを経由してヨーロッパにもたらされたとされている（日本にも伝わって将棋となった）。アラビア語でチェスを意味する単語「シャトラランジュ」は、サンスクリットの「チャトランガ」に発するとされ、これは「四つの軍団（歩兵、騎兵、象、戦車）」を意味している。

アッバース朝のころのチェスは、駒の形もルールも現代のものとはかなり異なっていたようだ。九百年ころのアラビア語文献によると、「ウマイヤ朝（六六～七五〇）のころには、ポーンは人間の形をしており、象や馬の形の駒もあった……私はそのような駒をたくさん見たことがあるが、現在では使われていない」。

現代のチェスにはルーク（rook）という駒があり、普通は塔の形で表現されている。なぜ塔の形で表現されるようになったかについてはいろいろな意見があるが、ルークはアラビアンナイトに登場する巨鳥ルフ（rukḥ）に由来するのではないとも言われてきた。ゾウをさらって食うという巨鳥ル

フは、古代ペルシアの伝説に登場する神秘的な鳥シームルグに起源を持つとされている。「シンドバード航海記」では、主人公シンドバードがルフの足に体をくくりつけて窮地を脱している。

巨鳥ルフとチェスのルークとの関係についてはよくわかっていないようだが、ダミリー（八八〇年死



ロク（ルフ）鳥の足につかまるシンドバッド（エドマンド・デュラック画、1914年）

去）の『動物生活誌』にはルフ鳥についての記載があり、この言葉はチェスの駒としても使われていると書かれている。またザビーディー（一二〇五年死去）も彼の大辞典『タージ・アルアールス』のなかで、「ルッフ（Rukhkh）はチェスの駒である」と述べている。

だが中世のアラビア語文献には、正体のよくわからない同名の生物も登場する。十二世紀の人マルワジーの著作に出てくるルフ（rukhh）は鳥ではなくてふたこぶラクダに似ており、二つのこぶを持つという。マルワジーは「ルフは風よりも疾く走って獲物を追いつめてしまう。獲物が木の上に逃げてしまうと、ルフはシャベルのような形の尾を広げてそこに排尿する。それから尾を振りまわして尿を獲物にかけろ。ルフの尿をかけられた獲物は死んでしまう。チェスのルフはこの動物にちなんで名づけられた。この駒は他のどの駒よりも強力だからだ」と続けている。

ちなみに中世に使われていたルーク駒の中には、中央部がへこみ両端が突出したM字形のものもあった。チェスの愛好者だったというハールーン・アッラシードが手にしたルークがどのような形だったかは、残念ながら現時点ではよくわからない。

2. 競馬とポロ

現代の首長国連邦ではラクダレースがさかに行われている。最近では、日本のテレビ局がロボット騎手を用いたレース模様を放映して話題になった。一般の日本人の感覚としては、ラクダは馬よりも遅いだろうと思ってしまうのだが、競争用のラクダは時速五十キロメートル前後で走ることができるそう。ナポレオンのエジプト遠征時に現地のラクダとフランス軍が連れてきた軍馬を競争させたところ、軍馬はラクダに追いつけなかったという話もある。これに目をつけたナポレオンはラクダ騎兵部隊を新設した。彼は軍装もアラブ風にすつりだったが、それだけはいやだという部下の猛反対を受けて断念したらしい。フランス軍ではラクダを使った救急部隊も創設され、ラクダ不足を補うために周辺の遊牧民からラクダを徴発しまくったそう。

中東は名馬の産地でもある。サラブレッドがアラブ馬から作出されたことは、ここでもくりかえすまでもないだろう。馬

の交配や飼養、調教や馬術をめぐるのは数多くのアラビア語文献が残っている。ちなみにアラビア語で「人相占い」を意味するフィラーサと馬を意味するファラスは同じ語源から来ている。馬は大切な財産だったから、馬市で騙されて癖のある馬や病気のある馬を売りつけられないように、馬目利きになっておく必要があったのだ。

アッバース朝の歴代カリフは、競馬場を設置して馬術や各種競技の振興に努めたことが知られている。戦争で勝利を得るには馬術の鍛錬が不可欠だったからだ。ただし競馬といっても勝負を予想して観客が賭けをするのではなく、優勝者が賞金や賞品を獲得するしくみだった。

上流階級は多くの名馬を所有しており、当時の年代記者によると、ハールーン・アッラシードの命によってバルマク家のジャアファルが開催したレースでは、ジャアファルの所有馬がカリフの馬を負かしてしまったという。別のレースではハールーン・アッラシードの所有馬が優勝し、カリフは躍りあがって喜んだそう。もっとも馬を用いた競争は金がかかったから、一般庶民はラクダ、ロバ、イヌ、伝書バトなどの競争を楽しんでいたらしい。

当時の記録によると、競馬には細かいとりきめがあり、走る距離なども馬の年齢によって細分されていたらしい。ある記録によると、三歳馬（現代のダービー出走馬と同じ馬齢）は約一万一千メートルのコースで勝負を競ったという。電光掲示板がなかった時代だから、きわどいレースになってしまった場合の賞金配分法についての規定もあった。勝利馬は豪華な賞品を得ることができたが、末等になってしまった馬は嘲笑の対象となった。年代記「黄金の牧場」を著したマスウーディーによると、末等の馬は首に縄をかけられて鞭を手にした猿を背中に乗せられたという。

バグダードが建設された三十年後、カリフのマフディーが最初の競馬場を造った。これ以後も歴代のカリフが各地に同様の施設を造り、競馬やポロなどを楽しんだ。ペルシア起源のポロはウマイヤ朝のころにアラブ世界にもたらされと言われており、現代と同じようにふた組にわかれて馬をあやつりながら長いスティックで球を追うスポーツだった。

ポロは上流階級の娯楽としてたいそうな人気があったらしい。ハールーン・アッラシードをはじめとする歴代カリフや宰相たちはポロの愛好者だったことが知られている。アラビアンナイトにもポロをめぐる物語があり、そのうちのひとつ「ユナーン王とドゥバーン賢者の話」では、ハンセン氏病におかされたユナーン王が、ドゥバーン賢者から贈られた特殊なポロ用スティック（握りの部分に薬が塗りこめられていた）を使うことによって治癒する話が物語られている。ちなみにこの物語に登場する古典的な殺人トリックは、ショーン・コネリー主演の映画「バラの名前」でも使われている。

今回はチェスと競馬をとりあげたが、中世アラブ世界の人々は、これら以外にもさまざまなゲームを楽しんでいたようだ。盤上ゲームとしてはチェス以外にバックギャモンにも人気があった。

「遊びをせんとや生まれけむ」とは平安期にまとめられた歌謡集「梁塵秘抄」にある一節だが、洋の東西を異にするとはいえ同じ時代に生きていたアッバース朝期の人々も遊ぶことが大好きだったに違いない。